様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　22 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19720127
研究課題名（和文）　項目学習と規則学習という観点から見た日本語学習者の動詞活用の習得

研究課題名（英文）Item learning and rule learning of verbal inflection by L2 learners of Japanese.

研究代表者
菅谷奈津恵（SUGAYA NATSUE）
新潟産業大学・経済学部・講師
研究者番号：90434456

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語の動詞活用が語彙のように暗記されていくものであるのか、あるいは、規則の学習を通して習得されるものであるのかを検討することである。テンス・アスペクト形式（ル、タ、テイル、テイタ）を中心にした文法テストと、造語動詞（実験用に作成した新語の動詞）と実在動詞を用いた動詞活用テストを実施した。調査の結果から、日本語の動詞活用においては規則を適用する能力と、一つ一つの活用形を記憶する項目学習の働きの両者が関わっていることが示唆された。そして、日本語母語話者と比較した結果，日本語学習者と日本語母語話者とは、動詞活用の処理方法が異なる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine whether the Japanese verbal inflection system emerges from item-based learning or rule learning. Using grammatical judgment tests targeted for tense-aspect morphologies and made-up verb tests and real verb tests we investigated the acquisition of Japanese verb conjugation. The results suggest that L2 development in verb inflection differs from that of JNS and that this affects both rote learning and explicit rule learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2100,000	390,000	2,490,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：第二言語習得、使用依拠モデル、動詞形態素、二重メカニズムモデル、暗記学習、コーパス

１．研究開始当初の背景

(1)筆者はこれまでアスペクトを中心に、第二言語としての日本語の習得研究に取り組んできた。その分析を通して、動詞活用のような「文法」形式の習得が、語彙項目のように一つ一つ記憶されていく項目学習

（item learning）的な側面を強く持つことが浮かび上がってきた。そこで、造語動詞と実在動詞を用いた実験を通して、動詞活用が真に項目学習であるのか、あるいは、規則の学習（rule learning）によって習得されていくのかを明らかにしたいと考えた。

(3)語彙項目と文法規則が延長線上にある（使用依拠モデル Usage-based Model）ものなのか、全く別個のものであるのか（二重メカニズムモデル）は、議論が盛んな問題である。日本語母語話者を対象とした造語動詞活用実験では、前者を支持する報告が見られるが、本研究では母語話者に加え日本語学習者をも含めて検討し、この重要課題を深く追求したいと考えた。

(2)教師としての日本語教育実践の中で、「*見っています」「*着らない」のように学習者が動詞活用で苦労する様子に日々接している。こうした経験から、動詞活用の習得に影響する要因とメカニズムを明らかにし、その成果を教育現場へ還元していきたいという着想を得るに至った。

２．研究の目的

(1)日本語学習者を対象に動詞活用の習得について調査し、項目学習（item-learning、語彙項目のように一つ一つを記憶する学習）と規則学習（rule-learning）との関連を検討する。

(2)得られた研究成果をもとに、日本語の動詞活用における効果的な日本語教育のあり方を考察する。

３．研究の方法

(1)理論的研究

動詞活用に関する先行研究から、項目学習と規則学習に関する議論をまとめた。また、これまでに行われた動詞活用実験について、その方法論を比較し、知見を整理した。

(2)データ収集と分析

日本語のレベル、学習環境（日本国内・国外）の異なる日本語学習者と、日本語母語話者のデータを収集・比較した。こうした要因の影響について検討を行った。

４．研究成果

(1)テンス・アスペクト形態素の習得調査について：動詞形態素のうち、テンス・アスペクト形式の習得について、以下のように調査を行った。

①日本国内の学習者 61 人を対象にした文法性判断テストを分析し、日本語学習者が生産的にテンス・アスペクト形態素（ル、タ、テイル、テイタ）の使い分けができるかどうかについて検討した。その結果、日本語能力の下位群は、個々の動詞を特定のテンス・アスペクト形態素と結びつけやすいことが明らかになった。一方、上位群は、ほとんどの動詞でコンテクストに合わせ適切にテンス・アスペクト形式を選択できるようになっていた。

②日本語学習者による結果と日本語母語話者の使用傾向とを比較するために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（デモンストレーション版）を用いて、各動詞のテンス・アスペクト形態素の使用頻度の相関を算出した。その結果、日本語能力の下位群でテイルの選択率にコーパス頻度との相関が見られることがわかった。したがって、日本語学習者のテンス・アスペクト形式の選択には、使用頻度が影響を与えていることが考えられる。

③上記の結果は、言語の習得はかたまり（formula）から、適用範囲の狭いパターン（low-scope pattern）、生産的な言語構造（construction）へと進むという N.Ellis (2003)の主張に合致するものである。

④テンス・アスペクトの習得は、様々な言語で行われているが、その中心となっているのは、「アスペクト仮説」に代表されるように、形と意味の結びつき（form-meaning mapping）を調べたものである。本研究は、形と形の結びつき（form-form mapping）という項目学習の影響をシステマティックに検討したものであり、先駆的な試みと言える。

(2) 造語・実在語動詞を用いた実験について：日本国内の大学で学ぶ留学生 41 人、及び、来日前の中国内モンゴルの日本語学習者 37 人を対象に、動詞活用テストを実施した。

①日本国内の学習者、海外の学習者を対象にした実験結果は、図 1、図 2 のようになった。いずれも、実在語の正答率は造語よりも有意に高く、どちらも日本語レベルが上がるに従って正答率も上がっていた。また、造語動詞の中でも、実在語との類似度により正答率が異なることがわかった。

②以上の結果から、日本語の動詞活用においては、規則学習と、一つ一つの活用形を記

憶する項目学習の働きの両者が関わっていると推測される。また、日本語母語話者データと比較した結果、日本語学習者と日本語母語話者とは、動詞活用の処理方法が異なる可能性が示唆された。

③これまで日本語の動詞活用について造語実験を行った研究は数が少なく、かつ、実在語と日本語レベルとの関連を検討したものは見当たらない。こうした要因を包括的に検討した点が、本研究の特色である。

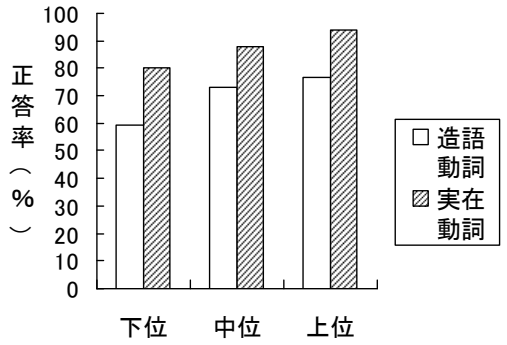

図1：日本国内の学習者を対象とした活用テスト

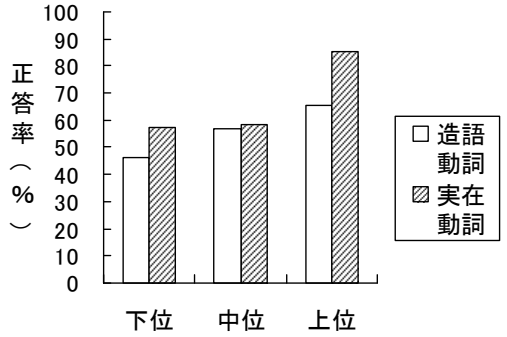

図2：海外の学習者を対象とした活用テスト

(3) 研究成果の発表と位置づけ：

①(1)については、2007 年にアメリカにおいて行われた言語学シンポジウムにて口頭発表を行った。同研究は改稿の上 2009 年にジョン・ベンジャミン社発行の書籍に収録された。両者は定式表現(formulaic language)にテーマを絞ったシンポジウム、書籍であり、関連分野の第一線の研究者が名を連ねている。こうした中に本研究が加えられたことは、一定の意義を認められたものと考えられる。

②(2)の日本国内で行った調査については、2009 年に Second Language Research Forum にて口頭発表を行い、現在英論文としてまとめている。また、同データの分析結果は、2010 年 4 月発行の『日本語教育』においても掲載された。学会誌への掲載により、日本語教育関係者への大きなインパクトが期待される。

③2009 年に、新潟県柏崎市の地方紙において、研究内容の紹介を行った。その際には、一般の読者を想定し、できるだけ平易な記述を心がけた。2010 年 4 月には、研究の概要をホームページを通して公開した。こうした取り組みが、科研研究の成果を社会へ還元するための一助となることが期待される。

(4) 今後の展望：

①中国内モンゴルと日本において収集した縦断データについては、分析を継続し、論文としてまとめている状況である。その際は、国外・国外という学習環境による違いと、日本語能力向上による影響について考察を進める予定である。

②2010 年 12 月には、第二言語習得研究会全国大会のシンポジウム「最新の SLA 研究と教育実践の方向性」において、パネリストとしての参加を予定している。本研究の成果をふまえ、第二言語習得研究が日本語教育にどのように貢献できるかを中心として、発表を行いたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①菅谷奈津恵「日本語学習者による動詞活用の習得について：造語動詞と実在動詞による調査結果から」『日本語教育』145 号、pp. 37-48、2010 年、査読有り

〔学会発表〕（計２件）

①Sugaya, N. 'L2 learners' outperformance of native Japanese: Evidence from nonce verb and real verb tests.' *Second Language Research Forum 2009*, Michigan State University, 2009.10.30.

②Sugaya, N. & Shirai, Y. 'Can L2 learners productively use Japanese tense-aspect markers?: A usage-based approach.' *UWM Linguistic Symposium on Formulaic Language*, University of Wisconsin-Milwaukee, 2007.4.21

〔図書〕（計１件）

①Sugaya, N. & Shirai, Y. 'Can L2 learners productively use Japanese tense-aspect

markers?: A usage-based approach.' *Formulaic Language Vol.2 Acquisition, loss, psychological reality, and functional explanations, the typological studies in language series,* John Benjamins, Edited by Roberta Corrigan, Edith A. Moravcsik, Hamid Ouali & Kathleen M. Wheatley. 2009 年 pp.423-444.

〔その他〕
地方紙への関連記事の掲載
①「産大レクチャー24：正しい言葉とは」
　柏崎日報 2009 年 6 月 12 日号
②「産大レクチャー25：文法はあるのか」
　柏崎日報 2009 年 7 月 15 日号

ホームページにおける研究概要の公開
http://www.cam.hi-ho.ne.jp/leto/grant.html

６．研究組織
(1)研究代表者
菅谷奈津恵（SUGAYA NATSUE）
新潟産業大学・経済学部・講師
研究者番号：90434456